

「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録推進フォーラム  
～ 縄文遺跡群を現代に活かす ～

■日時：3月21日(木)13:00～15:40  
 ■場所：ホテルポールスター札幌（札幌市中央区北4条西6丁目）  
 ■内容：●**状況報告** 報告 北海道環境生活部縄文世界遺産推進室 特別研究員 阿部千春 氏  
 ●**基調講演** 講師 北海道博物館長 石森秀三 氏 ※ **道民カレッジ連携講座**  
 ●**パネルディスカッション**  
 ※ いずれも事前申込不要・参加無料

参加無料



■問合せ：北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室 電話 011-204-5168

会員メッセージ



「感動の数々」

北の縄文道民会議 会員 飯塚敦子

縄文に“ハマる人々”という文面を最近目にしますが、私もその1人のようです。きっかけは“縄文を見る・出会う”という縄文旅との出会いで、なぜか子どもの頃の学びがとても懐かしく思い出されたのです。

これまでで6回ほどの参加ですが、縄文旅で楽しかった思い出を振り返ってみました。今までは博物館、資料館等に入館しても楽しさや感動はあまりなかったと思います。

これまで20カ所以上の諸施設を訪れ、遺跡を巡り同行される学芸員、見学先での係員の説明のおかげで、少しずつ理解ができました。“見て、聞いて、触れて”時にはバックヤードも見学でき、感動が生まれました。またそれだけではなく、バス移動中の自然の風景も感動です。しかも味めぐりも楽しめます。沖縄では、古民家での“沖縄そば”、鹿児島枕崎の“かつおたたき定食”、山梨は旬の甲州ぶどうの味は格別な感動です。でも最高の感動は、国立博物館での“日本の美”の鑑賞です。もちろん学芸員の方の説明付きです。知識のない、価値もわからない私ですが、すごすぎて、感動どころか声を失う様でした。

参加するたび思うのですが、この縄文旅は、どの旅よりも贅沢な内容だと思います。時には友を誘い楽しみたいと思いますが、もう少し、1人参加で静かに“ホットした思い”の旅を続けたいと思います。

- ◎ 会員の皆様、明けましておめでとうございます。このたび、『北の縄文』冬号の発行にあたり、安部・日本航空北海道地区副支配人様をはじめ、会員の皆様からご寄稿をいただき、お礼申し上げます。2019年の干支は『己亥(つちのとい)』。ちなみに『己亥』は『内なる充実をはかり、次のステージの準備をする年』を意味していると言われてます。今年こそ“猪(ちょ〜)嬉しい一年”になりますように!(T.H)
- ◎ 雪が積もって遺跡巡りはできませんが、講演や展示会が目白押しです! 足下に気をつけつつ、ぜひご参加ください!(I.K)
- ◎ TVで可愛い「ウリボウ」を見ました。今年は登録へ向かって猪のように突進したいです。(M.S)

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 編集長 谷 紘道 編集委員 井上香織、村上志保子  
 TEL:011-221-1122 FAX:011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail [ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp](mailto:ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp)



2019

VOL.10

平成31年1月発行

目次

■縄文という心の文化遺産	.....P1
■縄文てんぐ考	.....P2
■道内各地の活動状況/よもやま話	.....P3
■道外構成資産/縄文トピックス	.....P4
■イベント情報/会員メッセージ	.....P5~6

北の縄文コラム



縄文という心の文化遺産

大人になって、縄文と聞いてふと思い出すのは小学校の図工の時間に紙粘土で手作りした置物でした。でも改めて勉強してみると、土偶は縄文時代、埴輪は古墳時代なんですね。どちらのつもりで作ったかはさておき、昨年は東京国立博物館での「縄文特別展」、映画「縄文にハマる人々」の公開など縄文時代の人々が残した美しさや謎に魅せられた方も多かったのではないかと思います。

現代は技術が発達し、改善・改良でより良いもの、便利なもので溢れ、世の中は複雑化しているとも言えますが、縄文時代は自然の中からの新たな発見の連続だったことでしょう。その当時の生活から生み出された土偶や土器の表現にはザ・オリジナルと感じられる思い(氣)が練り込まれており、それらが発掘された遺跡には縄文時代に生きた祖先の証が感じられ、現代の私たちの心にも縄文の鼓動として伝わってくるように感じます。

そんな縄文の鼓動が「北海道・北東北の縄文遺跡群を世界遺産に」という声に乗り、もっと国内外に発信され、北海道の魅力として認知度が高まる一年になることを祈念いたします。また、北海道の食や観光に加えて、縄文という心の文化遺産に触れていただく機会を発信するお手伝いをしていきたいと思います。

日本航空 北海道地区副支配人 安部 圭太



# 「縄文てんぐ考」

札幌大学 名誉教授  
縄文芸術家集団 ジャーム 代表 原子 修

私の住んでいる小樽には、ロープウェイのある“天狗山”をはじめ、南東部の“天狗岳”や“銭函天狗山”などがあって、「天狗山」の名称の由来は「天狗火や煙が立ち、天狗が棲んでいるらしい」という噂がもとになっているという説もあります。

では、何千年も昔の縄文人は、どうだったのでしょうか。

標高二千メートルを超える大雪山の白雲岳遺跡をはじめ全国の高山の山頂付近の縄文遺跡の実例をあげた小林達雄は、著書「縄文の思考」（ちくま新書）の中で、縄文人の「山岳信仰」について述べています。

「こうした信仰は、現代にまでさまざまなカタチで継承されている」「その心は縄文時代に芽生え、一万年にわたって心のひだに刷りこまれたのだ」

この「山岳信仰」の祭神となる「山の神」については、坪井洋文の「この信仰の成立は人の死後その霊魂が山におもむくという山中他界説が基礎となっている。つまり、死後の霊魂が時間を経て先祖神となり、子孫の生活を守るために降りてくるのだと説明されてきた」（『世界大百科事典』（平凡社））という指摘も見逃せません。

たちこめる死者の霊と一体化して精霊現象へと妖しく昇華した祖霊が、超自然的な威力をもつ「山の神」へと顕現した存在こそが、山麓の群（むら）に暮らす縄文人の守護神となっていたのではないのでしょうか。

<鼻曲がり土面>とよばれる、青森県の下北半島から岩手県北部の地域で五面出土した、顔面いっぱいに大きく盛りあがった鼻がよろりと曲線を描く異形（いぎょう）の土面も、縄文人の祭祀の場で「山の神」に捧げられた仮面劇でそれを顔に付けた呪術師役の縄文人が、「山の神」の死者あるいは「山の神」そのものに扮して歌い踊るためのものだったのではないのでしょうか。あるいは、火のように赤い顔料を塗られた仮面は、下北半島の

猿群の北進ルートとからんで、深山の森の枝から枝へと飛び渡る猿に只ならぬ神意を感じていた証（あかし）なのかも知れません。<鼻曲がり土面>の奇妙な鼻も猿の鼻に発想を得たデフォルメの産物と考えられなくもありません。「猿は山王の使者として著名であり、猿神の信仰は古く」と記す『民俗学辞典』の見解も貴重です。

<聖山の御霊（みたま）>としての<山の神>の存在を、生きている間の<現（うつ）し身>にしっかりと刻みつけるべく自然に創案されたのが、<山の神>そのものとして依代（よりしろ）的に仮象された<てんぐ>の原型としての<超自然的な異界人（いかいびと）>ではなかったのでしょうか。

そして、その原型に、弥生時代以降の仏教や神道の思想、さらには山伏文化や修験者文化などとの混交による様々な変容を加えられて成立したのが、今日（こんにち）の「天狗」なのではないのでしょうか。

「天狗が史書の上に初めて登場するのは、飛鳥朝舒明（じょめい）天皇の九年（637年）都に大彗星が現れ（中略）中国から帰朝したばかりの留学僧の僧旻（そうみん）が、「流星二非ズシテ、是し天狗ナリ（中略）」と奏上したことが『日本書紀』に出ている」（『天狗の研究』（原書房））以降、「天狗」という言葉が登場し、妖怪の一つとなって今日に及んでいます。その深奥には、小林達雄のいう「縄文以来の霊山信仰」が脈脈と息づいています。

それを、私は「縄文てんぐ」と名づけて、小樽での「縄文祭」でその扮装姿を多くの方々にご披露致しました。昨年の9月2日と3日です。飛鳥朝以降のいわゆる「天狗」様とは趣きを異にした縄文世界の「聖山の御霊（みたま）」としての「縄文てんぐ」の一端を表現したのですが、今後の深化に期したいと存じます。



# 道内各地の活動状況

## 「2018 標茶縄文会の活動」

標茶縄文会 事務局長 類瀬光信

標茶縄文会は、地域の子どもたちに自分の足元に眠る縄文文化の痕跡とその価値を紹介することで、郷土愛と人間愛に満ちた青少年を育むことを基本理念としています。今年度は、教育委員会と連携し、「勾玉づくり体験」を複数回行うことにしていました。初回は、夏休み直前の7月21日、「子どもの夢を育てるまつり」での体験コーナー設置でした。そこで体験した子どもたちに再度体験していただくために、2回目は7月28日に行いました。リニューアルオープンしたばかりの標茶町博物館をお借りして、新博物館と標茶縄文会が2年がかりで造り上げた竪穴住居レプリカのPRも兼ねて行いました。夏休み最初の日曜日ということもあり、ご家族での参加が多く賑やかな一日でした。

標茶町博物館ですが、以前は「オーベルジュ ピルカ・とうろ」という、地元の食材を活かしたフレンチが売りの宿泊施設でした。諸般の事情から、ここ数年は遊休施設となっております。従来、隣接する旧集治監を標茶町郷土館として活用していましたが、旧集治監自体が文化財であり、老朽化が著しいことから、この「オーベルジュ ピルカ・とうろ」を標茶町博物館として利用することになったのです。

標茶町博物館は、塘路湖畔に佇む瀟洒な洋館です。塘路湖畔の散策路沿いには、縄文の遺跡が点在し、当会が設置した遺跡解説板が来訪者を歓迎していますし、竪穴住居のレプリカも当会会員の苦心と情熱を伝えています。こうした環境を背景として、標茶町博物館は今後、標茶縄文会の新たな活動拠点として大いに利用させていただく予定です。

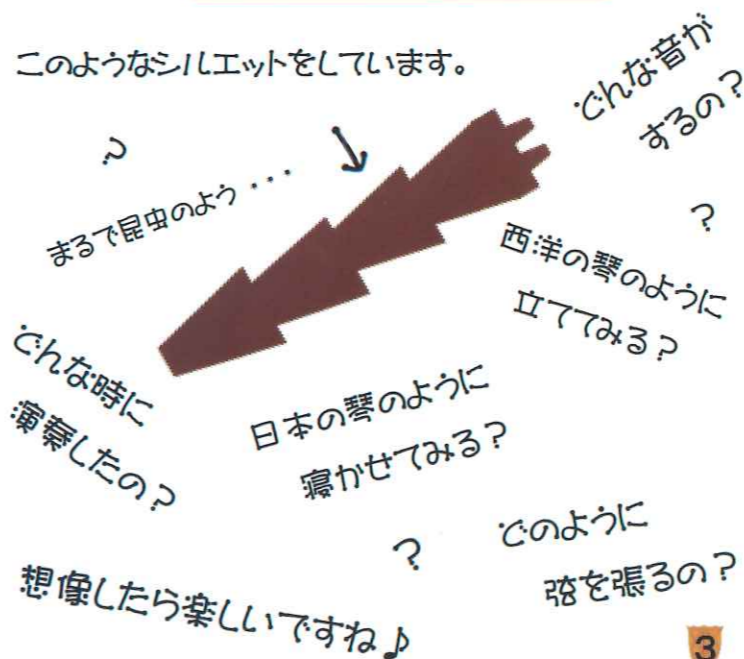


▲「標茶縄文会子どもの夢を育てる祭り」ブースの様子(昨年)

## 縄文よもやま話

### 出土した木製品の図

このようなシルエットをしています。



## ♪♪ 縄文琴 ♪♪

(…と、お呼びしてもよろしいのでしょうか?)

小樽市の忍路土場遺跡（おしよろどばいせき）から、長さ30cmで頭部に2本の角のような突起がついた、ちょっと変わった形をした板状の木製品が見つかっています。縄文時代では青森県是川中居遺跡や、滋賀県松原内湖遺跡、弥生時代では静岡県・三重県・福井県などにも似た例があり、これらは弦楽器（げんがっき）と考えられています。頭部の角状の突起から弦を張り、等間隔で張り出した肩を目印にして音程を変えたのでしょうか。祭祀の時や憩いの時など、一体どんなメロディを奏でていたのでしょうか。

想像するとわくわくしますね。